

がんばれ！多文化共生マネージャー

JIAMでは、外国人住民にかかわる制度や課題について理解を深め、多文化共生社会の進展に対応するための知識の習得、関係機関や部署とのコーディネート能力や企画立案能力の向上を図ることを目的として、「多文化共生マネージャー養成コース」を開催しています。

今号では、元JIAM職員で、現在客員講師でもある志渡澤祥宏さんが、山梨県甲府市で活躍する多文化共生マネージャーの活動や多文化共生の現状などを紹介します。

場の磁力～外国人住民を地域の力に～ 山梨県甲府市の多文化共生マネージャー

全国市町村国際文化研修所
客員講師 志渡澤 祥宏

みんなを表彰

～「介護のための日本語教室」修了式～

1月の甲府は予想に反して雪がなく、日差しもあって、JIAMのある関西よりも暖かい。山梨県立国際交流センターにて、加藤氏の姿を発見した。遠くから見てもすぐ彼だとわかるのは、長年のブラジル生活で身につけた振る舞いが、日本人とちょっと違った雰囲気醸しだしているからであろうか。山梨県甲府市の市民団体「ハート51」の代表・加藤順彦氏は、第9期（平成21年度受講）の多文化共生マネージャーである。マネージャー養成コース修了後の活躍は目覚ましく、山梨県、甲府市を巻き込んで、多文化共生事業、多文化共生の見える化に取り組まれている。

その取り組みの一つである「介護のための日本語教室」の修了式が行われるということで、早速会場へ。この事業は、マネージャーコースで講師を担当した（財）浜松国際交流協会の堀永乃氏の講義に触発された加藤氏が、文化庁の委託事業を受託して開催したものである。それは5月から12月までの期間に、1日2時間の授業を30回、実技指導を交え、介護に必要な漢字を習得するものである。最終目標は「この教室を修了した者はヘルパー2級養成講座で資格を取ることを目指すこと」としている。

まず、同事業の運営委員会を傍聴させていただいた。委員は、加藤氏、第3期（平成18年度受講）のマネージャーである（財）山梨県国際交流協会の坂上敬子氏、第11期（平成22年度）を当時受講中であった、やまなし国

際保健支援ネットワークの長坂香織氏、そして、池浦恵氏、小林信子氏の5人である。和気藹々とした雰囲気の中にも、同教室の受講者を3段階にランク付けするにあたり、個人個人の力量について、委員各自の専門的見地からのやりとりがあり、最終的に3名の方が最優秀と判定された。「この三人のうちの二人は、もう既にヘルパー2級養成講座の申し込みをしていますよ」と、加藤氏がうれしそうに話してくれた。

修了式の時間が近づくにつれて、廊下がだんだん賑やかに。ブラジル人男性、家族連れのペルー人女性、フィリピン人の女性4人組、トーゴ人男性といろいろな国籍の外国人住民が修了式にやってきた。今回の教室は、33人の外国人住民が参加、当日の修了式には、受講生13人とその家族が出席した。

加藤氏から、今回の日本語教室についての総評があった後、参加者全員が一人ひとり表彰された。まず1回でもこの教室に参加された方、次はもう少し頑張れば、最優秀のランクにステップアップできた方、最後に2級ヘルパー講座を受ける実力があると認定された



修了式にて（前列中央が加藤氏、その右が長坂氏、一番後列右端が坂上氏）

場の磁力～外国人住民を地域の力に～
山梨県甲府市の多文化共生マネージャー

3名の順に、長坂氏がお手製の表彰状を読み上げ、一人ひとりに手渡した。皆がうれしそうに、恭しく受け取っているその姿を見て、この日本で評価されること、認められているということを、どんな形であれ目に見えるようにすることが、外国人住民にとって非常に有意義なことなのだと実感した。最優秀の3名のうちの一人が返礼のスピーチで「私たちも日本に“stay in”ではなく、“live in”になるために、日本語や日本文化を勉強していこう」という一言を述べたのに対し、長坂氏は「自分のため、そして自分の家族のために歩んでいきましょう。これは一つのステップ、続けることが大事です」と話された。そのやりとりの中に、この事業は、外国人住民に対する単なる「支援」ではなくて、外国人住民が今後、甲府さらには山梨の地域力になることを目指して行われているのだと確信した。

外国人住民が気軽に集える場の重要性 ～「ハート51」「多文化共生センターさかおり」～

翌日、甲府駅前にある「ハート51」の事務所を訪問、日曜日の朝9時半だというのに、タイ人の家族とペルー人の家族が既に訪れていた。「タイ人の方はタイ国籍の娘さんの在留資格の件で、ペルーのお母さんは小学生と幼稚園の娘さんの学習のことで、来られています。土日のほうが忙しく、今年に入って休みはないです」と微笑む加藤氏。話をしている最中、ブラジル人女性が日本語の学習に来られ、日本語教室のスペースに異文化の花がより一層咲き乱れ、前日に加藤氏が語っていた「一歩前に出るための実践」の場を、肌で感じる事ができた。

加藤氏に「見せたいところがある」と言われ、甲府から電車で一駅の酒折駅前にある、平成22年10月にオープンしたばかりの、地域コミュ



多文化共生センターさかおりの前で(人物は加藤氏)

ニティの拠点「多文化共生センターさかおり」へ。加藤氏いわく「山梨学院大学が多文化共生の重要性を理解してくれて、留学生会館の一階を改装してくれたんです。次は、あそこの空いているスペースにカフェを、さらにはブラジル人学校をこの先の……」。彼の頭の中は目まぐるしく次へのプランが具体化しているようで、地域を巻き込んでいく力、場をつくっていく力を、ここでも垣間見ることができた。加藤氏の周りの関係者は、日本人だけでなくどんな国籍の人も、彼にその力を感じているようで、私も彼にはなんとも言えない、人を引き付ける磁力を感じた。

午後からは、やまなしインターナショナルネットワーク(以下「YIN」)が主催する新春多文化交流会に参加した。YINは、現在、国際交流事業や日本語教室を開催する、県内の35団体が加盟しており、今年で設立11年目を迎える。その基調講演で、長坂氏が山梨県立大学准教授の立場で「やまなし国際保健支援ネットワークの活動からみえてくる山梨の多文化共生の現状について」と題して講演された。実際に「子どもと母親のための多言語健康相談会」を実施する過程で、「たくさんの外国籍、外国にルーツを持つ県民が目の前にいる。さらには『痛み文化』一つにしても、国によって考え方が違うことを実感した」と語られていた。講演終了後のやりとりの中で、ここに参加されている様々な団体の方々、最初は日本語のわからない外国人への支援からスタートしたが、それだけではなく、外国人をその地域の住民として、ともに共生していかなければならないと感じておられることが、ひしひしと伝わってきた。

終わりに

甲府市の黄色の家庭ごみ指定ごみ袋に、「ハート51」のロゴと共に「多文化共生社会をめざして」という一言が印字されている。「これ、結構目立つんですよ。まず市民の意識づくりからです」と微笑む加藤氏。その目には、多文化共生を推進している元気なまち・甲府の姿がはっきりと投影されているようであった。

がんばれ、多文化共生マネージャー。